



校長室から

甘利 尚之

令和4年9月 8日(木) No.18

夏休みの自由学習に思う



夏休み明けの小学校の中、廊下は、にわかになぎやかになりました。夏休み中に子どもたちが取り組んだ「自由学習」の成果が展示されたからです。

以前は「自由研究」ということで、理科学習に関わる内容が主であったと思いますが、現在はそれに限らず、社会的な内容に関わる調べ学習、工作、手芸など、本当に自由に取り組んでいる様子が見受けられます。発達段階に応じて、ある程度の「枠」は設けているかと思いますが、自由に取り組まれたその成果を見ていると、「その子なり」がよく伝わってくるような気がします。



最近NHKの番組で、夏休みの「自由研究」について、どうして行われるようになったのか、といった内容を扱っているものを見ました。答えとしては、戦後、小学校の教育課程に、4年間でなくなってしまった「自由研究」という授業があり、その趣旨、考え方を引き継いでいるものとして、夏休みの自由研究はある、といった内容であったと思います。授業がなくなってしまった理由として、内容が多岐にわたり、なかなか教育課程の中では完結させることが難しかったという理由があったようにも記憶しています。



それと同じかと思いますが、夏休みの自由学習、自分にも経験がありますが、保護者の皆様の「負担」が少なからずあるのではないかと推察されます。そこから、「自由学習廃止論」もあるわけですが、子どもたちが、身近な大人の力を感じながら、自分がやりたい学習に取り組み、やり遂げる経験は、小学生時代の何物にも代えがたいものと言うこともできるのではないのでしょうか。

同じことが、地域の皆さんと関わる学習にも言えるのではないかと思います。地域への愛着は、そんなところからも芽生えると考えています。